

京都大學經濟學會  
經濟論叢

第六十四卷 第四・五・六號

京都大學經濟學部創立三十周年

記念論文集

第二集

- アダム・スミスの價值論……………岸本誠二郎  
カレツキーの『獨占度』と分配機構……………島津亮二  
原價計算法の理論的性格……………岡部利良  
第一次大戰後の外資輸入……………堀江保藏  
初期獨占……………堀江英一  
財閥考……………靜田均  
跋文

---

昭和二十四年十二月

## 創立三十周年記念特集號に寄せて

今年わが經濟學部創設以來三十周年に相當する。これを記念してわれわれは再建經濟學部の發展擴充に一層の努力を拂い度いと思つている。そこでこの日を迎えて平素考へてゐることを述べて見度い。勿論これは學部教官協議會で公式に討議に付して決定した見解ではなく、私自身の見解であるが、併し再建擴充に熱意を持つてゐる學部の教官諸君も恐らく私見と大同小異の考方を常に持つてゐることと私は確信してゐる。

再建經濟學部の教員組織は一應完了したと言つてよい。未だ助教講師等に空席があるがこれも遠からず充たされる豫定である。従つて再建經濟學部の仕事はこの教員組織で如何なる仕事をするかにかかつてゐると思ふ。そしてその仕事が經濟學の研究にあることは改めて言う必要はないであらう。問題はその經濟學の研究の仕方にあると思ふ。

この仕方、先づわれわれが第一に反省すべきはわれわれ科學者が現實を遊離してはならないと言ふことである。この意味は先づ科學者たる研究者が研究室に閉じ籠つて獨善的に提題してその解釋で満足すると言ふあの骨董的勉強にふけつたり、教科書作成を即科學的研究だと思つたりしてはならないと言ふことである。私は日本の社會科學者のうちにはこうした性向の人が從來多いのではないかと思ふ。そしてそれを「象牙の塔」に立てこもつてゐると自讃してゐるように思ふ。「象牙の塔」と言うのは現實に押し流がされないとの意味であつて現實を遊離すると言ふことではない。

そこで「現實を遊離してはならない」との意味に就て積極的に考へて見る必要がある。これは「象牙の塔」に立てこもることと矛盾しないのみでなく、そのことを同時に必要とするのである。「現實を遊離しない」と言う標語を實踐すると稱して、時代時代の「權力」や「勢力」やの「おかかえ」になる者が從來からわれわれ經濟學者の間には多いように見受けられるのである。勿論社會科學者は科學的研究の結果からして色々の程度の、そして又色々の種類の世界觀を持つてゐるのである。それは必然的なことであり、又必要なこともある。然し常にそうした世界觀が間違つていないかを現實の動きに照して反省し乍ら科學的分析をしなければならぬように思われる。従つて「權力」や「勢力」の行き方と科學者の世界觀が假に一致してもそれに就て常に反省して科學的研究をすることによつて事實を支配する法則を社會を構成する大衆の幸福を實現するように把握しなければ、その科學的研究は人類の歴史に寄與することにはならないのである。

ここで私が「現實を遊離するな」と言う意味は先づ人類の歴史に寄與するために、われわれの研究問題を「現實のなから掬いとれ」と言うことである。勿論その「掬いとり方」には色々の方法があるであろう。そしてその方法の差異が社會科學では重要な問題であろう。その「掬いとり方」は科學者の世界觀によつて定まる譯であるが、それは常に「社會を構成する大衆の幸福」を基準にする他はないであろう。そしてその具體的内容は歴史の發展段階によつて違つてくるであろう。大衆の幸福のために例えばスミスの時代は資本主義の確立を必要としたし、マルクスの時代は資本主義の克服を必要としたのである。われわれ社會科學者は常にこの基準によつて問題を掬いあげねばならない。

次に問題の解決即ちわれわれの研究は常に現實のなかに深入しなければならぬ。われわれの研究には自然科學

者の如く實驗方法はない。然しそれに替る歴史的・統計的研究がある。われわれ社會科學者はその成果に従つて理論的研究をする必要がある。われわれの經濟學の研究をふりかえつて見ると餘りにも歴史的研究・統計的研究を基礎としない單なる抽象的研究が澤山ありすぎはしなかつたであろうか。例えばわれわれが問題を解決しようとする時西洋の經濟學者の見解を引用し、その見解を唯形式論的に首尾一貫しているか否かを吟味して、形式的に辻褃の合う理論を立て、それが立派な理論的研究であると満足している場合が多かつた。否更に西洋の經濟學者の見解を解説紹介することを以て經濟學者の任務終れりとの態度を示すものさえあつた。

凡そ經濟學者が歴史に寄與し得るか否かは實踐に耐え得る——社會を構成する大衆の幸福實現の方策として——理論を把握するか否かにあるのであつて、單に形式的に辻褃の合つた命題を作成することで定まるのではない。いれんや西洋の經濟學者の學說の紹介のみで終り得る譯ではない。われわれは西洋文化が我國の文化に卓絶することゝ否定しようとは思わない。然し社會科學的研究に於て西洋の經濟學的研究の成果をそのままにとり入れることは出来ない。それは我國の經濟發達の地盤、從つて機構は西洋と、それとの間に相當の差異があるからである。西洋の經濟學の研究成果をとり入れるに當つては經濟學者は西洋の經濟學を內在的に批判分析し、それが如何なる世界觀、從つて研究方法と歴史の如何なる經濟機構のなかで展開したかを嚴に折出し、われわれの討究すべき問題が發生せる世界に結付くわれわれの經濟の現實機構に反省して適用しなければならぬ。

即ち經濟學的研究はその對象の經濟社會が歴史的な存在であることから、歴史的・統計的分析——勿論それはある程度の確實性をもつ「理論」を指導原理としてなされることを要する——の上に立つ理論的分析であることを要することである。我々はこの點で西洋での研究方法に多くの敬意を拂はねばならない。自然法的世界觀の影響を受

けたと云われるアダム・スミスの「國富論」が如何に實踐的經驗の成果に依據するか、又ヘーゲルの辯證法的論理方式の滓を多分に残すと云われるカール・マルクスの「資本論」がわれわれの想像に絶する歴史的研究のピラミットの頂點であることを見よ。更に現代に於てもケインズの「一般理論」が彼の多年の實踐の集積であることを見よ。これは偉大なる代表者であるが、經濟學界に寄與せる多くの西歐の文獻が我國の如く事實と遊離した命題の「つぎはぎ」でないことは確かである。

我國の經濟學が西歐經濟學に較べてかような缺陷を持つことは、我國文化が一般的に言つて後進國であり、そのために啓蒙を必要とする結果とも見られる。然しそれにも増して重要な原因はわれわれ經濟學者が社會科學者として上のような使命と方法とを自覺しなかつたことと、その結果經濟學の研究者が貴族的考方を持つていたために充たな協同的研究が出来なかつたことに由來することが多いのである。勿論經濟學界に於ても從來協同組織が全然なかつた譯ではない。然し協同組織もそれが貴族的編成であり、従つて社會科學者としての自覺がなくては所期の成果を興げることが出来なくなるのである。蓋しこのような協同組織では頂點に立つ指導者の考方に下部組織が奴隸的に使用され、下部からする事實による研究方法の反省がなくなり、結局この協同組織は單なる學界の政治團體になり終るからである。こうした事實は資本主義經濟學的な研究者ばかりでなく、社會主義經濟學的な研究者にも見られる所であつた。そしてそれはその組織員に對しては現世的御利益リヤクを興えたが、社會人衆には何等の恩典をも與えていないことをわれわれは反省しなければならぬ。社會科學者は過去のこの事實を鑑み眞に民主的な研究の協同組織を作らねばならない。

この研究の協同組織は問題を中心にして研究者が集り、研究者が問題の所在とその問題解決の方法に就て討議し、

次に研究者の能力に應じて研究分擔を定め、その分擔研究の成果を討議して方法を反省し「實踐に耐え得る」結論を導くべきである。この協力に當つて教授は常に助教以下の研究者の議論に注意して自己の獨善に墮ちいらす若き研究者の能力をのびし彼等が自己を乗り越えよう援助すべきである。若き研究者は先輩の教授助教の指導を仰ぎ乍らもこれに盲從せず、而も常に多數をたのみず「實踐に耐え得る方法」を基準とする正しい理論的方法を以てする研究組織による成果を興げるべきである。この際特に注意すべきは組織内の研究者の理論的成果が一人の研究者の名前によつて獨占されることがないように戒心すべきことである。

勿論このような協同研究組織は問題意識の接近せる者同志でなければなかなか成功しないであろう。そして我國の經濟社會の現状からすれば世界觀、從つて研究方法に於ては相當接近しても、經濟學界に於て資本主義經濟學に斜向する研究者と社會主義經濟學に斜向する研究者とがあることは止むを得ない所であろう。而してこの兩者何れもがその社會科學者としての自覺に於て人類を愛し、大衆の幸福を願う點に於て差異ある譯ではない。從つてこれを無批判に外部から政治的壓力を以て統合することは社會科學の存在意義を抹殺してしまふであらう。——これは科學と政治との關係に就ての人類の歴史が證明するところであるし、又理論的にも社會科學の自由な研究と發表とを妨害する政治的暴力はその政治が既に末期症狀を呈している證據であるが、その何れにせよ社會科學者は如何なる世界觀を持つものも『研究とその發表との自由』の確保に生命を懸ける必要がある。

而してその際に異つた社會科學者の協同組織の問題であるが、相接近せる世界觀、從つて方法を支持する研究者が互に結合して現實の問題の解決を自ざして協同研究して、その反對の方法での研究の結果と對決して「何れが實踐に耐え得るか」或は「自己の研究方法的如何なる所に缺陷があるか」を検討して新しい方法を補正し検討を進

めるべきである。かくして始めて直面する經濟社會の大多數が眞に幸福を享受し得る物的方法を檢出するであらう。就中經濟學に於て所謂資本主義經濟學的な研究者はその機能理論そのものも勿論であるが、特にその理論の前提をなす與件（構造）の變動の法則を發見するのだければ、到底實踐に耐え得ないことを熟考せねばならぬ。これに對し所謂社會主義經濟學的な研究者は最近その研究がマルクス的方法によると云い乍ら、マルクス・エンゲルスの文獻の解釋論に移つていないかを三省する必要がある。

何れの學派を問はずその間の對立が烈しくなるとその古典を不當にも「神化」し、古典の命題を眞理たることの論證の最後の據點にしようとするのである。これは如何なる科學に於ても科學者の殿につしむべき所でなければならぬ。社會科學者はその政治に結び付く世界觀が如何なるものであるにもせよ、常にその反對の立場からする理論に對して謙虛なる態度を持たねばならぬ。相手の暴力に對しても謙虛にそれを受けてこれを慎重に批判するのだけければ到底實踐に耐え、社會大衆に眞實なる幸福を與える道を見出すことは出來ないことを、我々は銘記せねばならぬ。

以上略記したことは最初に述べた如く私見であるが、わが京都大學の再建經濟學部に於て研究に従事するものは顯在的にか、潜在的にか、多少とも皆かような見解を持つてゐることを私は確信してゐるのである。今創立三十周年を迎えて、私自身先づ以て現段階の社會科學者として必要なる心構えを反省したのである。そしてわれわれが眞實に積極的にこの心構えを以て研究すればわが經濟學部は必らずや日本の學問の歴史の一章を書き換えることによつて「世界人類の自由」に重要な寄與をなし得ると云つても過言でないと思へるものである。

昭和二十四年十一月十一日

京都大學經濟學部長 豊 崎 稔